

三大介護の一つである排
瘡予防▽自立支援▽QOL
軽減▽在宅生活の継続
の生活や尊厳に密接に関わ

特集 大人用おむつの上手な使い方

特別養護老人ホーム 泉の郷日野南 (横浜市)

1日標準3回交換でQOL向上

介護職員のゆとりも創出

ユニ・チャーム(東京都港区、高原豪久社長)は大人用排泄ケア用品「ライフリー」シリーズの新製品追加リニューアルを春以降順次、実施する。第一弾として「一晩中安心のモレ・肌・ニオイパッド(Skin Condition)」シリーズのリニューアルに加え、Skin Conditionの日中長時間タイプを新たに追加。今回、社会福祉法人誠幸会が運営する特別養護老人ホーム泉の郷日野南横浜市での試用結果を報告する。



津村一仁施設長



西野徹矢主任

「泉の郷日野南」は2021年4月開設の個室ユニット型特養(120床)。横浜市内の閑静な住宅街に立地し、周囲には学校も多い。施設1階部分にはカフェも設置された地域交流スペースを設置。津村一仁施設長は「コロナの状況が落ち着いた地域の子供たちにも開放していく。イベントや食堂の開催も視野に入れている」と話す。

外国人の受入にも積極的。現在、ベトナムよりEPA候補者4人、技能実習生18人を雇用する。同時に、施設の課題とするのがケアの質向上と生産性向上の両立。西野徹矢主任は「施設も新しく、現時点でケアの技術習得に必要な教育体制は十分とは言えない」と述べる。

そこで今回、同施設が取り組むのが、**1日標準3回交換**
モレ・肌・ニオイも安心
Skin Conditionシリーズは肌へのずれ力・摩擦を低減する高機能尿とりパッド。世界初のスライドシート構造で、体位変換やパッドのヘッドアップ時の臀部へのずれ力を逃す。また、長時間・多尿量でも尿の逆流がほぼないため夜間も安心。今回のリニューアルタイプは、スキ

に強化した。夜間に加え日中の尿量にも見合ったタイプも追加した。

泉の郷では、常時おむつを使用する利用者へヘモ試用を実施。導入前は1日1人あたり6~7回の交換を行っていたが導入中は3回交換を標準に、利用者の排尿のタイミングや肌状態に合わせた適切な交換時間や回数を設定した。交換時間は9時・15時・21時を目安とし、必要な場合は朝5~6時に追加(図)。これにより日動・夜勤スタッフ共におむつ交換の負担がほぼ半減した。モレ回数も全利用者あわせて減少。製品機能の高さを実感できたという。

対象者のうち約半は日中生活

ユニ・チャーム メンリッケ 個別ケアと自立排泄をサポート 「TENA シリーズ」



ユニ・チャームメンリッケ(東京都港区、森田徹社長)は、スウェーデンで生まれた成人用排せつケア用品ブランド「TENA(テナ)」(成人用紙おむつ)を販売する。回ブランドは

ヨーロッパをはじめ北米、アジアなど世界100カ国以上で高いシェアをもつ。利用者の体型、排尿・排便状態、排泄回数に合わせておむつやパッドを選択するように軽装パッド▽下着のように動きやすいパッドタイプ「TENAパン」▽装着や交換が簡単にできるベルトタイプ「フレックス」▽長時間使用で漏れにくいテープタイプ「スリッパ」▽下着感覚で過ごせるパッドタイプ「コンパクト」▽少量の排便時の

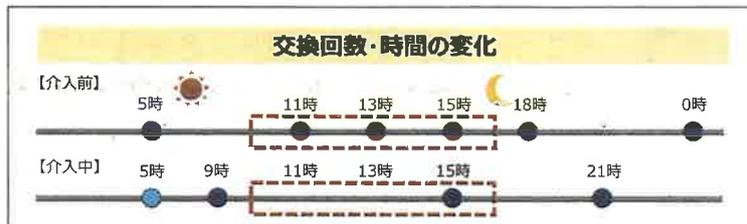
頻回交換に対応「デュオ」▽動いてもズレにくいパッド専用「フィット」▽フィクセーション」など商品展開も多彩。同社は「スキンケア」心地道るケアの基礎「ベリ」と「自立支援に向けた個々の課題解決」に向けて取り組む。

ほかに、災害時や感染対策としても活用できるクローブタイプの清拭タオル「ウェットウォッシュクローブ」、全身の皮膚を清潔にして保湿・保護する「ウェットワイプ」、汚れを浮かすからせて取り除く弱酸性クリーム「ウォッシュクリーン」も取り扱う。問合せは同社(☎03・5777・2019)まで。

が主にベッド上、残り5人が離床・車いすでの座位、いずれも仙骨突出、または仙骨突出で臀部の摩擦・スレのリスクを有するが、導入後のスキントラブルもなかった。

さらに評価が高かったのが排泄臭の改善。時間が経過してもニオイがほとんどしなかった。おむつのゴミも袋が1袋に半減し、使用量の削減が実感できた」と西野氏。利用者、スタッフ、環境に優しい結果が得られたと喜ぶ。

利用者に寄り添う時間創出
交換回数の見直しにより、多



者の隣に座り、一緒に時間を過ごす時間を大切にしたいというようになったと話す。西野氏も「特に昼食前後は居

るのスタッフや夜勤の業務改善を実感。「余裕をもつてケアにあたるようになった」と記録簿。清掃など対人以外の業務時間の確保がしやすくなった」などの声を得られた。日中生活にも変化が。以前はおむつ交換で常に慌ただしく利用者も声をかけづらい雰囲気があった。それが「明らかにスタッフと利用者に関わる時間が増えた」と津村施設長。利用

者も「今まで施設内で技術の標準化がはかられていなかった部分も確実にスキルアップできた」と話す。

効果の実感が、より質の高いケア意識へ
西野氏は「最初はモレへの不安から交換を減らすことに抵抗のあるスタッフもいたが、デモ試用を通じて『不必要な交換が多かったのでは』と排泄ケア全体を見直す好機になった」と説明する。

「技術的な要因によるモレ発生、パッドの無駄使いなど、適正化できる余地は十分にある」と西野氏。研修・教育を浸透させ、利用者のQOL向上に叶う排泄ケアに努めていきたいと話した。

AIにより体重や体形を推測しエアセルの圧力を自動で調整する床ずれ防止エアマットレス。自動体位変換機能「スモールフロー」を搭載。自動体位変換機能「スモールフロー」。